

新刊紹介

一万年前

—気候大変動による食糧革命、そして文明誕生へ—

安田喜憲 著

(株) イースト・プレス
2014年1月
サイズ：19.5 x 13.5 x 2.5 cm
白黒版 278 ページ、ハードカバー
ISBN：978-4-7816-1055-9
価格 1750 円

湖底において1年に1枚作られる年縞堆積物について、現在、福井県の水月湖での研究が世界的に注目を集めている。英国ニューカッスル大学の中川 毅教授や名古屋大学大学院の北川浩之教授をリーダーとして2006年に始まった湖上ボーリング調査では、総延長73.2 mにも及ぶ湖底コアが掘削され、その1 mmの抜けもない完全連続したこのコアセットを用いた日英独の研究者による国際共同研究が行われた。その結果、52800年前～11200年前にわたる過去約4万年間の年縞研究の成果をサイエンスに誌上発表した。約4万年で170年程度の誤差という精度の高さからこの水月湖の年縞データは、2012年フランスで開催されたInternational Radiocarbon Conferenceにおいて、世界のスタンダードに認定されたことは、我々の記憶にも新しい。さらに、後続する彼らの年縞研究の成果は次々とメジャーな国際誌に発表され、今や日本の年縞研究は世界をリードするレベルにまで到達していると言っても過言では無いのであろう。

国内に限ってみても、例えば、九州から関東地方まで分布する広域テフラである始良 Tn 火山灰 (AT) は、その年代値が29000年前～22000年前の間で大きなばらつきがあったが、第四紀学会や旧石器学会での中川教授らの口頭発表において、ATの年代が30009 ± 94年前になると報告された際は、多くの日本の考古学や第四紀学の研究者がこの結果報告を称賛した。

ところで、水月湖の年縞環境史学に最初に着手したのは、前述の中川・北川両氏ではない。実は、彼らの師匠である国際日本文化研究センターの安田喜憲名誉教授、その人である。英語の varve に年縞という訳語を与えられたのも、安田先生であった。安田先生による特筆される研究成果の一つは、これまで欧米追随主義であった第四紀編年研究に



おいて、“年縞を調べることにより、欧米で提唱されてきた11500年前が最も大きな温暖化への変化であったという編年が世界標準ではない。”事実を明らかにした点にある。水月湖の花粉分析結果、日本におけるヤングドリアス (Younger Dryas) の急激な気候寒冷化の影響は、欧米の大西洋沿岸に比べて小さく、この寒冷イベントは地球規模の気候変動ではなかったことが安田先生たちによって明らかにされた。

さて、安田先生がこの度出版された“一万年前—気候大変動による食糧革命、そして文明誕生へ—”は、ここから話が始まる。欧米のような大陸氷床縁辺と異なり、日本を含めた東アジアでは、晩氷期から後氷期の漸移期にあたる15000年前の温暖化がより大きな気候変化であったことが古気候研究の結果判明している。この温暖化に伴って、アジア大陸のヨルダンと長江流域において麦や米など穀物栽培が始まったのだ。現在の考古学の知識では、人類を文明へと突き進めたのは、この“農耕の誕生に起因する”と理解されている。

当時の縄文人は“豊かな食生活であったから、一万年前の間、戦争の無い世界を実現できたのかもしれない。”と

本書で安田先生は自説を述べておられる。“なぜ縄文人は、一万年以上もの間、平和な生活を維持することができたのだろうか？”，その理由としては、縄文人たちが、私たち現代人よりも生命と自然に対する畏敬の念を持っていたからなのかもしれない。資本主義を生きる我々現代人は、いかに効率よく資源を搾取し、いかに快適に暮らすかということに最高の価値観を持っていると言っても過言では無いであろう。一方縄文人にとって最も重要だったのは生命そのもの、即ち子孫の誕生であり、その後成長し、老化し、最後に人生の終焉を迎えるライフサイクルそのものであったのだろう。

生命を敬愛し、自然の中でゆったりと生き続けるライフスタイルを、ほぼ否定してきたのが、中世の産業革命以降の現代社会に生きる我々の価値観であった。しかし、最近頻繁に発生する大規模災害、我々を襲う原因不明の病気やアレルギー、不安定な世界情勢等を目のあたりにして、“その価値観が本当に正しいのか？”，と私たち現代人は自問自答し始めているのであろう。安田先生のお書きになられた“一万年前”と題する普及本は、私たち現代人の生活の価値観について考えさせてくれる貴重な啓蒙書と私は思う。

(産総研 地質情報研究部門 七山 太)